

## 1. 宣教の愚かさ

使徒パウロは1コリ1:21で次のように言いました。

「そこで神は、宣教の愚かさによって(διὰ τῆς μωρίας τοῦ κηρύγματος)、信じる者を救うこととされたのである。」(口語訳)

上記の口語訳は、ほぼ原典どおりの逐語訳であって正しいのですが、フランススコ会訳は「宣教という愚かなことによって」、新共同訳は「宣教という愚かな手段によって」と、それぞれたいへん苦労して訳しています。ここでいう宣教(κήρυγμα)とは、説教者の弁舌を意味するものではなくて、説教の内容、つまりその宣教する福音そのものを指しています。

現代の多くの信者はこれを、いわゆるメガチャーチを作ること成功した伝道者の大説教のこのように考えがちですが、使徒パウロはそんなことを言ったわけではありませんでした。前者はいかにも、“福音はよく分からないが、教会経営の大成功者の話なら興味がある”という、現代一般信者の共感を呼ぶような“聖書の読み方”であるには違いありませんが……。

使徒言行録の最初の数章にあるペトロの説教は、著者ルカがエルサレム教会のごく初期の(恐らくアラム語の)資料から得たもので、ある特別な機会に語られたペトロの正確な言葉の記録ということではありませんが、明らかに最初の使徒たちの宣教の型を示しています。そして注目すべきことに、その後の使徒パウロの宣教とも基本的に一致しているのです。使徒パウロ自身がこれを、彼より前にキリスト者となった他の人から「受けた」と言いました(1コリ15:3)。この宣教の基本的内容は、次のような型に従っています。

ナザレのイエスは、ダビデの子孫より生まれ、死に、葬られた。神は三日目に彼をよみがえらせ、彼が裁き主、救い主として来るまで、メシア、主、神の子として御自身の右に上げたもうた。このすべてにおいて、神は聖書における御自身の約束を成就し、来るべき時代を開始したもうた。使徒たちはこれらのことの証人であり、彼らの宣教を受け入れる人に、神は罪の赦しのための洗礼を通して聖霊の賜物を与える。

最初のキリスト教は、このような宣教から始まったのであって、それは使徒たちが証言するイエス・キリストについての宗教でありました。…それはイエスの宗教というものの再現ではなかった…のです。

ですからこの宣教に欠くことの出来ない要素は、その出来事の証人としての使徒自身です。現代の教会もこの使徒たちの証しを通してキリストの福音を聞くのであって、教会の宣教奉仕とは今も、イエス・キリストの出来事に対する使徒たちの証しの継続なのです。この宣教は“福音の宣教”であって、現代のキリスト者である私たちは、熱意さえあれば聖書から直ちに、その内容を生き生きと学ぶことが出来るのです。

使徒パウロは1コリ15:1以下で、彼が「どんな言葉で福音を告げ知らせたか」(v.2)の想起を要約しています。「キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ……」(vv.3-5)そしてさらに付け加えて、「わたしたちにしては彼ら(他の使徒たち)にしては、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした」(v.11)と書いています。

ロマ10:8fでは、「わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉」の内容が、「イエスは主である、…神がイエスを死者の中から復活させられた」という言葉で述べられています。

さらにロマ14:10で彼は、「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」と言いましたが、この座は11コリ5:10によれば「キリストの裁きの座」です。

以上から明らかなのは、使徒パウロの宣教が“キリストの死、復活、主であること、裁き”を一連の内容としていたということです。

この「十字架につけられたキリストを宣べ伝える」(1コリ1:23)宣教は、ある人々には“愚かなもの”、他の人々には“つますかせるもの”でありました。使17:30-32によれば、パウロがギリシアのアテネでキリストの復活と裁きを宣教したとき、「死者の復活ということを知ると、ある者はあざ笑い、ある者は、“それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう”と言った」と報告されています。

同様に現代人にとっても、“使徒たちから伝えられた福音”は、一方では“教会にゆだねられた信仰の遺産”(カテキズム)でありつつ、他方ではしばしば“愚かなもの、つますかせるもの”であります。特に驚くべきことには、新来者や洗礼志願者から見て“信仰の先輩”であるはずの教会の信者たち、さらには彼らが頼りにするべき教会の教導職である司教と司祭の大部分にとって、実際には“使徒たちが伝えた福音”が愚かなものにしか思われていないという事実があるのです。それはいわば現代の教会の公然の秘密(もしくはしたら常識)なのです。

私はそのような現実を直視しつつ、しかも、それでもなお、そのような教会のためにこの「聖書講義」を書いていきます。なぜなら、「十字架の言葉は、わたしたち救われる者には神の力です」(1コリ1:18)、「福音は、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」(ロマ1:16)たとえどんなに少数であるとしても、“狭い門から入る人々”(マタ7:13f、ルカ13:23ff参照)のために、主が私のこの奉仕を用いてくださるであろうことを信じているからです。

## 2. 使徒的宣教の終末論的背景

ガラ 1:4 「キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。」

ヨハ 5:28f 「驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。」

来たらんとする終末の裁きは、宣教の前提であり出発点であります。キリストの死と復活の事実が意味を持つのは、終末論的背景においてであって、それは「死んだ人にも生きている人にも主とされるため」(ロマ 14:9)でありました。そして、「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(使 10:42)のです。今や新しい時代が始まり、キリストはすでにこの新しい時代の主である。そしてこの世の完成に当たって、彼は審判者として、救い主として、その主権を行使するために来られるのです。

私たちがもし使徒たちのこの宣教の起源を問うとすれば、それは主の復活後の偉大なる四十日の背後に迫ることになります。そこには最初の弟子たちに、イエスの出来事は神の啓示であり、贖いの行為であったと確信させた特別な経験が存在しました。だれもその出来事を客観的に描いてみせることは出来ません。ただ確かなことは、最初の弟子たちをこの信仰に導いたのは、復活のイエスとの出会いの四十日(使 1:3 参照)であって、イエスがその地上の生涯において与えた教えではなかったということです。

そして私たち現代のキリスト者がイエスを神の贖いの行為として信じるのは、教会に連なる者として使徒たちの宣教を聞き、信仰の決断をするからであって、イエスがその死と復活以前にどのような自意識を持っていたらどうかなどと、あれこれ詮索することによってではないのです。

最初の弟子たちにとって、この四十日の体験がどのようなものであったかを推測する材料を、私たちは聖書から拾い出すことが出来ます。ルカ福音書は、キリストが弟子たちに聖書を解き明かして、御自分が苦しみを受け、復活して栄光に入ることの必要を説明された様子を述べています(24:25-27,44-48)。復活のイエスは弟子たちに、今や御自分が天と地の一切の権能を授かっていること、福音は信じる者すべてに救いをもたらす神の力であることを教えて洗礼を授けるといふ、宣教命令を与えられました(マタ 28:18-20、マコ 16:15-20 他)。同じように、最初の弟子たちより3~4年遅れてダマスコ途上で復活のイエスに出会ったパウロも、そこで宣教命令を与えられました(使 9:15f、ガラ 1:15f)。使徒ペトロは、最初に復活のイエスにお会いした者として(ルカ 24:34、1コリ 15:5)、使徒的宣教の主な担い手でありました。そのような者として、彼は教会がその上に建てられる岩とされたのでした(マタ 16:18)。ですから、その後に復活の主にお会いした人々の証しさえ、十二使徒、特にペトロの証しに一致しなければなりません。そうでないとそれは「無駄」になるからです(ガラ 2:2)。この宣教命令には、聖霊の賜物が伴っていました(ヨハ 20:21ff)。使徒たちの宣教はそれ自体神の直接の活動であり、キリストにおける神の救いの行為の、(主が再び来られる)「世の終わりまで」(マタ 28:20)の延長であったのです。

ペンテコステから始まった原始教会の宣教において、それに先立つイエスの歴史は、今や復活節の啓示の光によって新しく解釈されることによって、真にキリスト教の宣教の内容として取り上げられ組み入れられました。これを単純に、使徒たちによって「イエスの宗教」が「イエスについての宗教」に改変されたと見るべきではありません。なぜならそれは、復活節の啓示の光における神の行為によって生じたことであつたからです。

原始教会の宣教がどのような種類のものであったかを、私たちは使徒言行録のペトロの説教から推測することが出来ます。「神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このように実現なさったのです。」(3:18) そしてこれから「慰めの時」すなわち「万物が新しくなる時」が来るのです(vv.20-21)。救済史における決定的な行為は遂行されました。しかし、完成はなお将来に待望することです。

### 3. 神の国の福音

共観福音書の支配的な主題である神の国(マタイでは天の国)の宣教は、使徒言行録では神の言葉、あるいは福音を告げ知らせる、またパウロの手紙では福音、あるいはキリストを宣べ伝えるなどと表現されています。

この「神の国」と直訳されているものは、本来“王としての神の支配”を意味し、旧約聖書以来のイスラエルの神観をその中に含む概念であって、信仰深いユダヤ人にとっての未来の偉大な希望でありました。ここで一般に教会で大いに乱用されて来たいくつかの誤解を挙げておきましょう。(1) 神の国とは、イエスの教えを基礎として人間が建設する地上の理想の国のことである。(2) この世はやがて進化して、最終的には理想の神の国が実現するであろう。(3) 神の国とは、地上の教会のことである。(教会憲章は教会を地上における神の国の芽生え、世の終わりに神によって完成される神の国を目指していると説明しています。) “王としての神の支配”は、もちろん人間の服従を要求するけれども、それに人間が応答してもしなくても存在し、終末の完成を目指す神の歴史における動的な行動として理解されなければなりません。

最初の教会は、神がイエスにおいて直接に、また決定的に行為されたと宣教しました。それは、終末論的背景におけるキリストの死と復活の事実の宣教でありました。使徒たちが最初の復活節の経験において理解したイエスは、甦って、天に上げられ、事実上その支配を開始した神の国の王でありました。決定的な行為は遂行されました。しかし神の国の完成はなお将来に待たれ、彼は審判者として、救い主として、その主権を行使するために来られるのです。

イエス・キリストが十字架につけられて死に、復活したのは、おそらく紀元 30 年のことです。いちばん古いマルコ福音書が書かれたのは紀元 65 年以降、ヨハネ福音書は一世紀末頃の著作と考えられます。それに対してパウロの手紙はほぼ紀元 51 年から 64 年の間に順に書かれたと推定されています。パウロは福音の前進に英雄的な役割を演じただけでなく(Ⅰコリ 15:10)、初期の教会における偉大な神学者でありました。

使徒パウロは自らの育ちについて「ヘブライ人の中のヘブライ人」(フィリ 3:5)と言って、そのユダヤ的な起源を認めています。彼は福音のために、かつて受けたユダヤ教の神学的訓練を「塵あくたと見なし」(フィリ 3:8)しましたが、それにもかかわらず神学者の心と技術をもって福音宣教に没頭したのでした。そして、パウロが宣教した福音の内容は基本的に、使徒たちが宣教した最初の福音と共通のものでありました。彼が回心後ダマスコで(使 9:19)、エルサレムで(使 9:26ff)、またアンティオキアで(使 11:25f)、使徒的福音伝承を受けたということも考慮するとしても、その後彼はケファ(ペトロ)に会うためにエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しました(ガラ 1:18)。それが使徒の頭であるペトロからの伝承を受けるためであったことは明らかです。これは、最初の使徒たちだけが主の啓示の直接的担い手であり、彼らすべての共通の証言だけが正しい福音伝承を形成することが出来るということの意味しています。使徒パウロは Ⅰコリ 11:23 でこの伝承を「主から受けた」と言っていますが、彼は他の使徒たちのように地上のイエスにはお会いしていなかったのですから、それは神の右に上げられたキリストのことであって、このような使徒的伝承の中に復活のキリストが働いておられるという理解を述べたのです。

パウロによれば、キリストの復活は終末時代の過程の開始であります。つまり復活したキリストの体に結び合わされた(エフェ 4:12ff)霊的な家(Ⅰペト 2:5)、すなわち教会の開始です。このことを彼は救済史の枠の中で理解しました。キリストは個人として甦ったのではなく、最後のアダム、新しい人類の頭、眠りについた人たちの初穂として復活したのです。「アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」(Ⅰコリ 15:22) ですからその宣教の中で主要なことは、個人の救いではなくて、終わりの日に神が御自分の民を回復されること、個人ではなくて共同体の救いでありました。洗礼を受けるとは、この共同体の一員として加え入れられることなのです。

最初の教会の宣教が、二つの世 …… この世と後の世(マコ 10:30) …… という救済史的世界観を前提にして語られていることを、私たちは理解しなければなりません。主の日は、決して一つの事件に続く次の事件というような意味でのこの世の事件ではありません。それはもはや次にどのような事件も続くことの出来ないもの、続く必要のない救済史の完成、すなわち後の世(来るべき世)なのです。永遠の命とは、この来るべき世の命(ζωή αἰώνίου)のことです。

ですから、教会において信者一同に与えられている救いには、“まだ …… ない”という性格が貫かれています(ロマ 8:23ff、ヘブ 11:1、Ⅰヨハ 3:2 他)。この世にある教会の救いは、約束された神の国の先取りであり、教会は聖霊によって御国を受け継ぐ保証を与えられているのです(エフェ 1:14)。そして、実際に御国を受け継ぐのは信者一人一人の死の時ではなくて、キリストの再臨の時であります。

## 4. 再臨の遅延と再解釈

最初の教会の宣教(ケリュグマ)においては、キリストの復活、高く上げられたこと、および再臨が、分かち得ない一つの神的事件の部分であったことを、私たちは認めなければなりません。預言は成就され、メシアは来たのです。残っているのは、すでに現存するものの完成であり、それゆえに人々は悔い改めなければならないのです。「主が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」ことがいつでも起こりうる時代が来たからです。差し迫った再臨の待望は、彼らの信仰の中に深く根を下ろしていました。

ところが主の復活から数十年のうちに、この残された部分である再臨は実現せず、終末論的過程の連続が破られることとなります。主は雲に乗って来られなかったのです。終局が思いがけもなく遅れたことによって、原始教会の宣教は何らかの調整を必要とすることになりました。

まず第一は、ユダヤ的、黙示文学的終末論を利用した救済史の再解釈です。その例として、Ⅱテサ 1:7-10、2:3-10、および マコ 13 章を挙げる事が出来ます。この流れはヨハネ黙示録において頂点に達します。

第二は、キリストの死と復活の事実に注意を集中することによって、これを終末論的救済の出来事として説明することです。これは特にパウロの手紙の中で認める事が出来ます。「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」(Ⅰコリ 15:20)「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。」(Ⅱコリ 5:17)「わたしたちは皆、…… 栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。」(Ⅱコリ 3:18) このように、キリストの死と復活によって救済史はいまや、「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(Ⅱコリ 5:17)段階に達したのです。

Ⅰペト 2:22ff では、イザヤ書 53 章に照らしてイエスの苦難と死が述べられていますが、ここで重要なことは、イエスが事実その通りに行動されたということであって、著者はそれをパウロと同じように、終末論的完成の一部として説明したのです。また ヘブ 9:11ff では、キリストの死を永遠の秩序への通過として説明して、「御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです」と述べています。

神はその民を訪れてこれを贖われたという確信が、主の再臨の遅延によるあらゆる解釈の変化にもかかわらず、キリスト教信仰の基本的要素として一貫していることを見ると、私たちは驚きを禁じ得ません。

福音書については、それが最初の教会の宣教(ケリュグマ)におけるイエスの歴史的部分を拡大したものであり、そのような歴史はケリュグマの要素として書かれたのだということに、注意を喚起したいと思えます。それらの伝承は、実際に最も近かった人々や、それ等の事実によって大きな影響を受けた人々の証言によって伝えられたものでありますが(ルカ 1:1ff 参照)、最初のケリュグマおよびその後の再解釈という枠の中で伝えられ、保存されて来たのです。ここではヨハネ福音書を取り上げて、その問題の一端に触れておこうと思います。

ヨハネ福音書が書かれたのはほぼ一世紀の終わり頃、対象になっている読者は原始教会から数えて二世世代三世も後の時代の人々でありました。著者が行ったのは、すでにある三福音書を解釈し、イエスの活動とその死、および復活と昇天を、“天的な意味を持った救済史の出来事”として明示することでありました。神はすでに決定的に行われたのです。ですから裁きは終末の日に到来することでありつつ、しかもすでに現在の事実なのであり(3:17ff, 5:22ff)、永遠の命は復活の日の命でありつつ(6:39f, 44, 54)、しかも今すでに御子キリストを通して信じる者に与えられているのです(6:47)。この福音への信仰を共有する同志的団結こそが、互いに愛し合うという新しい掟の内容なのであり(15:12)、福音(わたしがあなたがたを愛したように)への信仰から切り離された、普遍的、人道的な愛の事ではありません。ぶどうの木と枝の譬え(15:1ff)で“キリストにつながっている”とは、“その友のために自分の命を捨てた彼の愛の対象となること”(15:13)であり、その応答として彼を愛し、彼を信頼し、彼に従い、彼に属するすべての人を愛することなのです。

キリストの再臨が遅延したことによって、これを未来のもう一つの別な神的事件のように考え、教会による宣教の終末的性格を割引するために、このような再解釈が行われたと考えるなら、それは全く間違っています。というのは、実際に近代の多くのキリスト教信者が、裁きや神の国への復活を死後の世界のことと考えるようになり、聖書が語る終末とキリストの再臨についての記述を、もはや文字通りには信じることの出来ない原始的な思想として切り捨てて来たことは、周知の事実であるからです。しかし聖書は、その解釈の変化にもかかわらず、キリストの再臨による救済史の完成への待望を語ることを決して弱めはしませんでした。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」(ヨハ 6:54)「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」(マコ 14:62)

## 5. 主の再臨とその象徴的表現

これまで述べて来たように、原始教会の宣教は終末論的背景を持っていました。メシアの来臨と共に、神の国は出現したのです。彼の復活と神の右に上げられ、民の上に聖霊を注がれたことは、明らかに新しい時代が開始したしるしでありました。残るところは、すでに到来した“終わりの時”(使 2:17)の完成だけなのです。

この“最後の完成の日”という考え方は、旧約の預言者たちが語った「主の日」(アモ 5:18ff 参照)、すなわち終わりの日の裁きと共に救済史の神的意味と目的とが遂に明らかになる日に由来するものです。それは“この世”の歴史が終わってその次には最早いかなる事件も続くことの出来ない、そのような“来るべき世”の発端なのです。

新約聖書ではそれが一方では「裁きの日」(マタ 10:15)、「怒りの日」(ロマ 2:5)として語られていますが、それよりもむしろ希望の対象として、「わたしたちの主イエス・キリストの日」(I コリ 1:8)、「わたしたちの主イエスの来られる日」(II コリ 1:14)、「キリスト・イエスの日」(フィリ 1:6, 10, 2:16)などという表現で述べられていて、この希望が再臨の遅延にもかかわらずあくまでも、教会の宣教の基本的要素として一貫しているのです。「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神のうちに隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(I コリ 3:3f)

ミサは最初から、終末的典礼でありました。「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」(I コリ 11:26) カトリック教会は、「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わってこれに参加している」(典礼憲章 8)と述べ、そのようにして教会は「神の国の完成を渴望し、全力を尽くして、栄光のうちに自分の王と結ばれることを望み求めている」(教会憲章 5)と教えています。

過去にも、そして現在も、福音の目的は人間がこの世に“神の国を建設することである”と思っている人々がいて、その根底には“世界はきっと良い方向に進歩する”という、はなはだ怪しげで無責任な楽観主義が存在します。しかし、聖書が伝える使徒たちの宣教は、死んで、また復活することについて語っているのです。それは象徴的、黙示文学的、あるいは神話的表現によってしか語ることの出来ないものなのです。「人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来る」という聖書の言葉は、それ以外の表現によっては伝えられない「神秘としての神の知恵」(I コリ 2:7)であります。

すでに久しい以前から近代人は、聖書が非科学的な古代の文書であって、今ではそのまま文字通りには信じることが出来ないと主張して来ました。再臨の遅延によって原始教会の福音が途中で再解釈されたというような神学者の主張が現れると、多くの人々が最早キリストの再臨は信じなくてよいのだと思うようになりました。福音の“非神話化”などという難解な神学が登場すると、その内容は理解出来なくても、とにかく聖書をそのまま信じなくてもよいのだと多くの信者が安心したのです。いったい原始教会は、その福音宣教を伝えるのに、“そのまま文字通りには信じなくてよい話”として聖書に保存したのでしょうか。

一つだけ例を挙げてみます。現代人にとっても、“朝日は昇り、夕日は沈む”のです。これは間違った天動説的理論であるから、そうではなくて“地球が自転して、太陽の見える角度が・・・”と説明しなくては、正しく理解出来ないのでしょうか。いつの時代にも象徴的、神話的表現はたくさん生きているのです。私たちは聖書を“信じなくてもよい”のではなくて、熱心に読んで、その“宣教の愚かさ”(I コリ 1:21)に素直に耳を傾けなければなりません。

“神はイエス・キリストにおいて贖いの業を決定的に行われた。教会は今それを享受しており、最後の完成である主の日を待ち望んでいる”ということを伝える使徒たちの証言が、新約聖書に保存されている福音の内容のすべてであり、それこそが教会の説教の標準、また源泉であります。この世では「わたしたちの知識は一部分、預言(説教)も一部分」(I コリ 13:9)であって、歴史の教会の宣教はいつも、その時代の人々にキリストの事実を生き生きと伝えるために、神学的奉仕(解釈)に励んで来ました。

当然、良い神学もあれば悪しき神学もあるのです。しかし、「おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。」(I コリ 3:13) そしてその日には、キリストの事実、もはや解釈の必要がなくなることでしょう。「彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである。」(エシ 31:34)